



多角的なデータ分析で 医療・介護施設の的確な 経営戦略を立案

人材育成とデータ抽出・分析の効率化で
意思決定の迅速化を実現

60分の1以下

Accessで1時間を要したデータ抽出・分析が1分未満で完了

社会医療法人愛仁会

<https://www.ajinkai.or.jp/>

AIJINKAI
 Ajinkai Healthcare Corporation
 since 1958

社会医療法人 愛仁会
明石医療センター

業 種：医療・介護

従業員数：6,500名

(2023年11月現在)

資 本 金：社会医療法人のため計上なし

所 在 地：

大阪府高槻市古曽部町1-7-14 (愛仁会本部)

兵庫県明石市大久保町八木743-33 (明石

医療センター)

事業内容：

1958年設立。大阪市西淀川区の千船診療所に始まり、「貢献・創意・協調」を法人のモットーとして事業を拡大。現在は大阪府・兵庫県で多数の病院・介護施設などを運営する。急性期の高度な医療や回復期の専門的なりハビリテーションの提供に加え、介護・健診業務、看護師などの人材育成にも注力している。

導入前の課題

データの分析手段や組織体制の制約が課題

法人設立当初から経営にデータを活用する組織文化はあったものの、具体的な分析手段や組織体制の制約により、経営層や現場のニーズに十分に答えられなかった。さらに、2000年代以降の医療制度改革により、自院以外の各種データも扱わなければならない、いっそう困難な状況になった。

解決策

データ分析人材の育成と組織・環境整備を進め、ユーザーと利用範囲を拡大

Tableauを導入し、資格取得の勉強会を通してコア人材を育成。法人全体に対してTableauへの関心を高める活動を推進すると同時に、各施設でデータ活用の組織と環境を整備し、Tableauのユーザーと活用範囲を拡大していった。

導入後の効果

意思決定の迅速化などの成果を挙げ、データドリブン文化が徐々に浸透

地域連携活動や広報活動などの戦略立案に活用。各施設でも医療圏の状況を細かく分析し、施策の立案や展開に反映できるようになった。データ準備・分析の大幅な効率化によって意思決定が迅速化されるなどの成果を挙げ、データドリブン文化の定着化が進んだ。

選定理由

大量のデータを扱える点やスモールスタートが可能である点などを評価

外部に出向した職員がTableauを持ち込んだことがきっかけで検討を開始。大量データでも快適に扱えることや、ビジュアライゼーションを前提としたデータ分析ができること、スモールスタートが可能な製品体系であることなどを評価して導入を決定した。

導入時期：2014年11月

導入製品：Tableau Server、Tableau Desktop、Tableau Prep

ライセンス数：Creator：11、Explorer：10、Viewer：10

主な利用環境：企画・分析部門および経営層で利用中

導入に要した期間：約2か月



お客様プロフィール



お名前: 田中 信吾 様
役 職: 部長
部門名: 愛仁会本部 情報システム部門
主な担当業務: 法人の情報システム部門を統括する立場から Tableau の導入を主導し、分析に必要なデータソースの整備や各施設の支援などを行う。



お名前: 金谷 甲輝 様
役 職: 課長
部門名: 愛仁会本部 企画部門
主な担当業務: 田中氏の呼びかけに応じて最初に Tableau Desktop Specialist の資格を取得した1人。データ抽出・分析や他の職員の教育に携わる。



お名前: 西本 享司 様
役 職: 科長
部門名: 明石医療センター 企画分析・広報科
主な担当業務: 2021年に新設された企画分析・広報科の科長を務め、データ分析の専任担当者3名とともに同センターにおけるデータ活用を推進する。



お名前: 川上 瑞希 様
役 職: 副主任
部門名: 明石医療センター 企画分析・広報科
主な担当業務: 企画分析・広報科の副主任として、医師・看護師をはじめとする現場からの依頼を受け、Tableau によるデータ分析を行う。



お名前: 松本 麻里 様
役 職:
部門名: 明石医療センター 企画分析・広報科
主な担当業務: 川上氏と同じく企画分析・広報科に所属し、現場のニーズに応えるデータ分析を行い、結果を提供する。

導入の背景

データ活用の文化はあるものの、その手段や体制に課題

社会医療法人愛仁会は、大阪府と兵庫県にまたがる広い地域で医療・介護事業を展開しています。1958年に設立され、大阪市内の診療所1施設から始まった同法人は、その後の65年におよぶ活動によって、現在では急性期病院4施設、回復期病院2施設、介護施設6施設、健診センター2施設、看護専門学校2校を運営し、職員約6,500名を擁する組織に成長しています。

同法人には、設立当初からデータを積極的に活用して経営に取り組んできた歴史があります。愛仁会本部 情報システム部門 部長の田中信吾氏によると、医療業界では珍しいケースではないかといえます。

「データという科学的な根拠にもとづいて意思決定することは、医療提供の面では当然です。しかし、民間にはオーナー経営の医療法人が多いためか、経営面では必ずしもそうではありません。その中で、当法人は民間ですが非同族経営なので、昔から合議制で数字にもとづいてものごとを進める文化がありました」（田中氏）

ただ、そんな同法人にも、データ活用に関する課題がなかったわけではありません。もともと同法人では、本部や各施設の情報システム部門や企画部門が他部門から依頼を受け、Excel や Access で時間と手間をかけてデータを抽出・分析していました。また、BI ツールの活用については、月次の活動状況表を作成して定型レポートを提供する程度に留まっていた。そのため、経営層や現場の求めるスピード感やニーズに十分に答えられない、という問題があったのです。

行き詰まった状況に追い打ちをかけたのが、2003年のDPC制度（診療報酬の包括評価制度）の導入や2014年の病床機能報告制度の創設といった国の制度改革。従来のように病院内の診療に関する数字だけでなく、それらを取り巻くさまざまなデータを扱わなければならないようになったのです。同法人の急性期病院の1つである明石医療センターにおいて、企画分析・広報科の科長を務める西本享司氏はこう話します。

「単一項目のデータでも抽出・分析に時間がかかるのに、スピーディーに複数項目や時間軸などを組み合わせて多角的にデータ分析するのは難しく、経営層や現場に対してデータにもとづく意思決定の支援を十分に行えていなかった」（西本氏）

そこで同法人は2014年、法人内の状況や環境の変化に対応すべく Tableau を導入し、まずは1ライセンスから利用を開始したのです。

Tableau 導入・運用環境

勉強会やワークショップでTableau人材を育成

同法人は最初に、それまで本部の情報システム部門においてExcelやAccessで行っていた作業を置き換えるところから、Tableauの利用を始めました。ただ、その後数年間は、組織体制やライセンス構成が十分でなく、Tableauの利用はごく一部の職員に留まっていたそうです。

活用拡大のきっかけになったのは、2020年にTableau社によって実施された、Tableau Desktop Specialist認定資格試験を通常の半額で受験できるキャンペーンでした。田中氏はこう振り返ります。

「仲間を増やすいい機会だと思い、本部の職員数名に声をかけました。そして、受験費用を法人負担とする支援のもとで一緒に勉強して資格を取り、Tableauのライセンスを徐々に増やしていきました」(田中氏)

愛仁会本部 企画部門の金谷甲輝氏も、その取り組みを通じてTableauを使えるようになったコア人材の1人です。

「Tableauを使ってみたくてずっと思っていました。資格取得という目標に向かって、1人ではなく皆で勉強したからこそ、スキルを身につけられたのだと思います。Excelなどのほうが早くできる作業でも、あえてTableauを使うように意識することで、少しずつ慣れていきました」(金谷氏)

続いて同法人は、本部内だけでなく、各施設の職員の集まる会議でもTableauの分析結果を見せるなどして、法人全体に対してTableauへの関心を高める活動を進めていきました。並行して組織と環境を整備し、2021年に明石医療センターに企画分析・広報科を新設、2022年には同科に科長兼任の西本氏以下、データ分析の専任担当者を3名配置しました。

さらに、Tableauの利用者と活用範囲を拡大すべく、本部主導で共有データソースの整備やダッシュボードファイルの作成・共有を行いました。また、Tableau社の支援のもと、本部職員が講師となり、希望者を対象とするオンラインのワークショップやハンズオンを年2〜3回のペースで開催し、データ分析への関心やスキルの向上を図りました。それらのイベントには、各施設のデータ分析担当者はもちろん、Tableauに興味のある人事部門や財務部門などの職員も多数参加しました。明石医療センター 企画分析・広報科 副主任の川

上瑞希氏と松本麻里氏は、Tableauのスキルを習得した過程についてこう話します。

「なにもわからないところからのスタートでしたが、本部の職員の丁寧なサポートを受けながら、Excelなどで行っていた業務をTableauに置き換えていきました。スキルを身につけるためには、とにかくたくさん触って慣れていくのが一番だと感じました」(川上氏)

「使い方の流れをつかめていない段階でも、経営層や現場から課題をもらい、自分でTableauを使って分析してみる。その結果はグラフでわかりやすく可視化されるので、Tableauにはこういう特徴があってこう使えるのだ、というイメージをだんだんつかんでいくことができました」(松本氏)

松本氏のように本部で2ヶ月間の研修を受けスキルを習得した後、施設に戻って業務に活かし、さらに他の職員に使い方を教える。そうした形で、同法人におけるTableauの利用は徐々に拡大したのです。

Tableau 導入の効果

膨大かつ多角的なデータ分析にもとづき
経営・活動の戦略を立案

同法人の本部や各施設の分析担当者は、データ可視化・分析には自分の端末内のTableau Desktopを、ダッシュボードの共有やデータソースの提供にはTableau Serverを利用しています。そして他の職員や経営層は、Tableau Serverにパブリッシュされたデータを参照し、さまざまな業務や意思決定に活かしています。

たとえば本部では、法人全体の経営・活動データの可視化・分析や、各施設の医療圏内のデータ比較などを行っています。そうした活動において、従来のツールでは不可能だったことが、Tableauな



ら簡単にできるようになった、と金谷氏は喜びます。

「収入の分析1つをとっても、従来は法人全体だとデータ量が多すぎ、1か月ごと、施設ごとというように分析対象を絞らなければならず、安定した傾向を見ることができませんでした。それに対して Tableau は、法人全体の3~4年分のデータでも手軽に、迅速に分析できます。格段に多くのデータを扱えるようになったことで、以前より信頼性の高い分析が可能になりました」（金谷氏）

一方、明石医療センターでも Tableau の活用は進んでいます。一例として、厚生労働省による「退院患者調査」データを取り込み、同センターの医療圏の状況（患者エリア、他院との比較、紹介・退院支援の状況、入院期間など）を細かく分析し、営業・セミナー・研修会などの地域連携活動や、広報誌・チラシ・SNSなどを有効活用する広報活動、収益改善活動などの戦略立案に活かせるようになったのです。

「Tableau は、地図分析の専用ソフトを用いることなく、地理情報システム（GIS）のデータを直接読み込み、散布図も簡単に作成できるので、直感的にデータの特徴を発見できます。どういう疾患や紹介患者がどのエリアでどう増減しているか、患者の転院先としてどの病院の受け入れが早いかなどを地図やダッシュボードで視覚的に把握し、経営層に病院運営の提言をしたり、営業・広報活動などの次のアクションにつなげたりしています」（西本氏）

導入の成果と今後の展開

データ分析の効率化・高精度化を実現、データドリブン文化の定着を目指す

同法人における Tableau 導入の効果は大別して2つあります。1つはいうまでもなく、データ分析に関する各種作業の効率化です。西本氏はいいます。

「Access だと処理に1時間かかっていたことが、Tableau なら1分足らずで終わるなど、データの準備作業や分析、資料作成の時間が大幅に短縮されました。また、ツール自体の総合的な使い勝手という点でも、以前が5段階の2だとすれば現在は4、つまり2倍ぐらいに上がったと感じています。

大量のデータでも分析速度が低下せず、Viz を簡単に作成・変更

できるので、アジャイル的なデータ分析が容易になり、効果を定量的に示すのはなかなか難しいですが、結果として意思決定も迅速化されていると考えています」（西本氏）

そして、もう1つの効果として金谷氏は、「今までできなかったことができるようになったこと」を挙げます。

「従来ツールでは処理できなかった量のデータを分析できるようになったのは、本当に大きな成果です。たとえば法人全体の収入を分析するのに、以前は短い期間や各施設について個別に分析して結合していましたが、今は一気にデータを分析し、より安定した精度の高い結果を導き出すことができます。

また、以前なら分析のトライアンドエラーを1回しか行えなかったのと同じ時間内に、4回、5回とさまざまな分析を繰り返せるようになったことも大きな進歩です。分析のサイクルが早まったことで、経営層や現場のニーズに対して、多角的な視点からさまざまなデータや結果を提供し、ユーザーの気づきを後押しできるようになりました」（金谷氏）

推進側のそうした実感は、現場でも共有されているようです。

「以前は Access でクエリを作成するのに非常に頭と時間を使い、出た結果が間違っていればやり直しにさらに時間がかかりました。Tableau は、考えるより先に手を動かし、直感的にデータを入れてトライアンドエラーを繰り返せる。そこに大きなメリットを感じています」（川上氏）

Tableau のスキル習得を通じて人材を育成し、組織全体でデータ分析の効率と品質、訴求力を向上させた愛仁会。今後の展開について田中氏は、Tableau Desktop Specialist の資格取得をはじめとするユーザーのさらなる拡大や、一部施設で利用している Salesforce との連携などの具体策を挙げた上で、次のように締めくくりました。

「最終的な目標は、そうした施策や活動を通じ、設立以来のデータドリブンな組織文化をいっそう定着させることです。それに向けて私たち推進側は、これまでメインの分析対象だった収入や患者数だけでなく、人事情報や財務情報、診療自体を評価する臨床指標などのデータを Tableau にどんどん取り込み、分析したい人が Tableau にアクセスすればどんなデータでも揃っている、という環境を整備したいと思っています」（田中氏）

無料トライアル版をダウンロードして、ぜひ Tableau をお試しください。

<http://www.tableau.com/ja-jp/trial>

株式会社セールスフォース・ジャパン Tableau 事業統括